


2013 年度

国際交流事業 活動報告書

～韓国産後ケア学習プログラム～



 関東学院大学 看護学部看護学科

(母性看護学)

母性看護学における国際交流事業

関東学院大学看護学部看護学科 母性看護学
引率教員 坂梨 薫
勝川由美

1. 韓国産後ケア学習プログラムの目的

近年、本邦では核家族化と結婚・出産年齢の上昇に伴う親世代の高齢化、厳しい経済状況を背景とした退職後の親世代の就業継続により、実母や義母から産後の育児支援を受けることが困難な状況になりつつあります。健全な次世代育成のためには、出産を終え、家族の再構築を担う母親をどのように社会で支援していくかが重要な課題といえます。この現状を踏まえ、育児不安の早期解決を図り、小児虐待等の防止に役立てる目的で、横浜市は10月1日から国の事業化に先駆けて「産後母子ケアモデル事業」を始めました。この事業の対象者は、家族の支援を受けることが出来ず、育児不安等が強く支援が必要な人といった一部の母親に限られています。

日本の隣国であり、経済成長を続ける韓国においても、日本と同様に核家族化や少子化といった問題が生じており、合計特殊出生率の低さは世界のトップクラスという状況が持続しています。その韓国では、出産後の不養生はその後の女性の健康問題に大きな影響を及ぼすと考えられ、産後の母親の身体回復を目的とした、21日間家族が産後の母親を支援する Sanhujori と呼ばれる慣習がありました。しかし、母親世代の就業や都市への集中化に伴う核家族化に伴い、日本と同様に実母や義母による産後の支援が困難な状況が出現しています。その状況を克服するために、慣習を上手に活用しながら母乳育児や新生児の健康チェック等の育児支援を組み込んだ、産後ケアセンターが注目されています。韓国では出産での入院期間が2泊3日と短いため、多くの産後の母親達が利用しており、ソウル市及びその近郊に約300施設あるといわれています。2013年に日本の有名女優が韓国の産後ケアセンターを利用したため、日本でもその存在が周知されました。

本プログラムは、日本と類似点を持つ、韓国の産科医療施設と産後支援の現状を視察することで、産後ケアの重要性や社会状況を考慮した支援方法の必要性を学ぶことを目的とします。また、他国の歴史や文化に触れ、現地の人々と交流を持つことで、国際的な視野を育むことも期待できます。

2. 研修施設の概要

| | |
|-------|--|
| 施設名 | ベベリタ産後養生院 |
| 施設の概要 | ソウル市内（東大門）に位置し、2013年に開院した新しい産後ケア施設で、医療職者ではない一般人が経営している。ベッド数は15床で、費用は250万ウォン/2週間（約18万円）である。母乳育児に力を入れており、専任助産師がSMC法による母乳ケアを提供している。産前・産後教育は専任助産師が、新生児ケアは看護師がケアを担当し、看護ケアの質の確保に努めている。夫は宿泊可能である。経産婦に配慮し、上の子供との面会を可能としていたが、新生児への感染の問題が浮上したため、今後中止予定である。2回/週、小児科医が回診し、新生児の健康チェックを実施している。 |
| 研修目的 | 産後ケアセンターは宿泊サービス業に属しているが、入所中の新生児に感染症が発生することが問題視され、2006年の「母子保健法、改正法律」で産後ケア施設の職員の配置と施設設備を整え、届出制となった。経営者が一般人である産後ケアセンターを見学し、産後ケアの実際を学ぶとともに、ケアの質確保への配慮の実際を理解する。 |

| | |
|-------|--|
| 施設名 | ハンアルム産後養生院 |
| 施設の概要 | 大学病院の小児科病棟の勤務経験を持つ看護師が院長を務める。高層アパートが立ち並び、韓国で最も裕福な人々が暮らすといわれる江南地区に立地し、高層ビルの5～6階（2フロア）に19室がある。費用は2週間で350～400万ウォン（約25～30万円）かかる。居室は洋室で、ダブルベッド、TV、PC、シャワー・トイレ、冷蔵庫、酸素発生器等を備えている。夫は宿泊可能。家族のみ、新生児と直接面会できる。小児科医師が1回/週、入所中の新生児診察を行う。 |
| 研修目的 | 医療従事者である看護師が経営する産後ケアセンターを見学し、衛生面にも配慮した韓国の産後ケアの実際を学ぶ。 |

| | |
|-------|--|
| 施設名 | オープンファミリー助産院 |
| 施設の概要 | 1999年に開業した助産院で、2013年からは経営者が変わり、3名の助産師が共同経営している。7室の居室がある。「家族に対して開かれた助産院」という点を重視しており、夫が妊娠中から妻を支えていくことができるよう特に留意してケアが行われている。分娩件数は20～30件/月で、分娩費用は保険が適応され無料であるが、部屋料金15万ウォン/泊（11,000円程度）が必要となる。夫も宿泊可能であり、ほとんどの利用者の夫は分娩時から入所中は休暇をとって妻に付き添う。入所期間は、平均3～4日である。 |
| 研修目的 | 分娩と産後ケアを併設する施設のケアを見学し、分娩から産後を通し一貫したケアの重要性を学ぶ。 |

| | |
|-------|---|
| 施設名 | 聖愛病院 |
| 施設の概要 | <p>金潤光医師（現理事長）により1968年に聖愛医院として開院し、その後総合病院として発展。現在は、聖愛病院（ソウル永登浦区）と光明聖愛病院（光明市、ベッド数466床、医療職者660名、24診療科22診療科と）の2病院からなる非営利医療法人。見学した聖愛病院は、ベッド数424床、医療職員560名（このうち、看護職300名、医師87名）の規模を持ち、救急、総合健康増進センター、母子センターなど10個のセンターを有す。民間病院として大学病院レベルの最先端医療検査施設を有し、全国医療機関評価で2回連続、最優秀等級に選定された。このほか、高齢者に対し無料健康教室や脱北者に対する無料診療、軍の負傷患者の治療、身寄りのない患者診療支援、失業者家族分娩費支援など、幅広い活動を実施している。</p> <p>産科病棟は21床で、家族分娩室（夫立会い）や水中出産設備、陣痛緩和のためのアロマ利用、バランスボールの利用等、日本の産科医療施設と同等の設備を有す。産科医師4名で、看護師11名、助産師7名（分娩担当）が配置されている。2011年度の分娩件数は853件あり、少子化の影響で年々減少傾向を示す。救急搬送受け入れ施設のためハイリスク妊産婦が多く、帝王切開率は45.4%にのぼる。助産師教育を行う指定病院でもある。</p> <p>金潤光理事長は、モンゴルに対する民間外交間として貢献し、モンゴルの医師・看護師等の研修受け入れや、在韓モンゴル勤労者の診療支援にも力を入れている。</p> |
| 研修目的 | 産科医療施設を見学し、韓国の周産期医療の現状を知る。 |

3. 研修の行程

| | 月日 | 時間 | |
|-----|------|---|--|
| 1日目 | 8/26 | 10:05 12:05 14:25 16:00 17:30 | 羽田空港国際ターミナル集合 羽田発(0Z1015)便にてソウル(金浦)へ ソウル着 青瓦台, 国立民族博物館 見学 ホテル着, 各自、自由行動 |
| 2日目 | 8/27 | 9:30 10:00 11:30 13:00 14:30 16:30 20:00 21:50 | ホテル出発 ベベリタ産後調理院見学・研修 (ソウル市東大門区) ハンアルム産後養生院見学・研修 (ソウル市江南区) 昼食(石焼ビビンバ) (ソウル市西大門区) オープンファミリー所参院 見学・研修 (京畿道富川市遠美区) ホテル着, 各自、自由行動 アクロバットパフォーマンス「ジャンプ」観劇 ホテル着 |
| 3日目 | 8/28 | 10:30 11:00 12:30 14:00 | ホテル出発 聖愛病院 産婦人科及び病院見学・説明会 (ソウル市永登浦区) 昼食(ブテチゲ) ホテル着, 各自、自由行動 |
| 4日目 | 8/29 | 8:30 10:00 11:30 12:30 14:00 17:00 | ホテル出発 韓国民族村 見学 (水原市) 水原華城 散策 (水原市) 昼食(カルビ) KBSドラマセンター 見学 (水原市) ホテル着, 各自、自由行動 |
| 5日目 | 8/30 | 午前 12:30 15:30 17:35 | 自由行動 昼食(冷麺とチジミ) 金浦発(0Z1045)便で羽田(東京)へ 羽田着・現地解散 |

韓国母性看護学視察研修報告書

看護学部看護学科

1年

今回、韓国の産後ケア研修に参加し多くのことを学ぶことが出来た。産後調理院、助産院、総合病院を視察し韓国の助産・産後ケアがどのようなものか、調理院、助産院、病院のそれぞれの違いなどが学べた。

ソウル市東大門区にある、ベベリタ産後調理院はベッド数15床。夫婦で使えるようにダブルベッドで、兄弟は風邪などのウイルスが赤ちゃんに移ると大変なので一緒に泊まることはできない。スタッフは助産師1名、看護師5名、助手9名の18名。週に2回小児科の医師が調理院に来て、母親や赤ちゃんの様子を見てくれている。この調理院の特徴は、母乳指導に力を入れていることである。院内に母乳センターもあり、この調理院の利用者のほとんどが赤ちゃんに母乳を飲ませている。病院食のわかめスープにも力を入れている。産前・産後に全身マッサージやヨガも行っている。新生児室もあるが、母親の希望があれば赤ちゃんとの同室も可能である。1か月の利用者は25人ほどで、中国・カナダ・オーストラリアなどの外国の方も来るそうだが、まだ日本人の利用者は1人もいないとのこと。この調理院は母親の心身をより早く回復させるために床がすべてオンドル

で温かくなっていたり、部屋のベッドが夫婦で使えるようにダブルベッドになっていたりと、利用者がどれだけ快適に過ごせるかを重要視している感じがして、とても雰囲気もいい産後調理院だった。

ソウル市江南区にあるハンアルム産後調理院はビルの上階にあるため部屋からの眺めがとてもよく、リラックスできる雰囲気食堂はカフェのようになっている、とても調理院とは思えない内装で、とてもおしゃれだった。院内には骨盤矯正のマッサージチェアや、足の浮腫みを取るマッサージ機、イス型の蒸し器など利用者が自由に使用できるマッサージ器具がたくさんあった。サウナ室やマッサージルームも完備しており、利用者のストレス軽減に力を入れているようだ。この調理院の特徴は、食事は利用者みんなと食堂で食べるということである。各自の部屋で個々に食べるのではなく、みんなで食べることでコミュニケーションを取ることを重要視しているようだ。この調理院は、部屋からの眺めや内装の工夫など、利用者がよりリラックスできストレスが溜まらないように様々な工夫がされている調理院だった。

富川市遠美区にあるオープンファミリー助産院はベッド数7床で、1ヶ月の利

用者は20～30人ほど。基本的に立ち合い出産が多く、夫だけでなく家族みんなが立ち合う事も多いようだ。利用者の多くは2泊3日の滞在で、その後調理院へ行く人もいるようだが、助産院の理想としては5泊6日が一番いいとのこと。母乳指導にも力を入れており、産んですぐに調理院に行くのと、産んでから5泊程度助産院に滞在してから調理院に行くのとで母乳育児の成功率が変わるようだ。

母乳育児の成功率は、病院や助産院で産んですぐ調理院へ行く場合は30%、助産院に滞在してから調理院へ行く場合は90%となっている。このオープンファミリー助産院を利用されている方の旦那さんに、調理院や病院でなくなぜ助産院を選んだのかと質問したところ、「助産院は、自然分娩でストレスが少ないと思ったから選んだ」とのことだった。この助産院はすごくアットホームな雰囲気、産前、産後もリラックスして過ごせる空間になっていてとてもよかった。院長は、助産師の役割に産後ケアも含まれていると考えているようで、産後の母乳指導にも力を入れていて素晴らしいなと感じた。とても暖かい雰囲気の助産院だった。

ソウル市永登浦区にある聖愛病院は1968年に創立した45年目の病院で、創立当初は産婦人科・小児科中心の病院であったが、現在は22の科がある総合病院となっている。聖愛病院は2つの病院を持っており、ベッド数は2つの病院合わせて1000床。開院してからの総出産数は、約12万3000人とのこと。この病院は親切・節約・人和を院訓としている。病院の総スタッフは全部で525人、その中で看護師は300人である。院内には健診センターがあり、福祉活動も盛んに行われており医療支援も行って

いる。産婦人科には専門医が4人おり、ベッド数は21床。産婦の教室もやっている。90%が無痛分娩で、24時間対応している。45.4%が帝王切開とのこと。家族みんなが立ち合える家族分娩室などの多様な分娩室も見学した。24時間母子同室。退院時には、ニワトリのパーベキューと子どもが使えるようなお土産を渡しているとのこと。母乳育児をすすめているとのこと。毎年400人以上の危険な状態の子どもの治療も行っている。2泊3日の入院なので産後ケアはあまり出来ていないようで、80～90%が退院後、調理院に向かうとのこと。この病院はとても大きな病院で施設がとても充実していて、助産院とは違った良さがあり、とてもいい環境で赤ちゃんが産めると感じた。看護師や専門医も沢山いるので安心できると思った。産後ケアはあまり出来てないようだが、調理院とうまく連携をとっていけば、より良い環境で産婦さんのケアができるのではないかと感じた。理事長さんや先生方がとても親切ですごくいい病院だった。

今回、韓国の研修に参加して今まで知らなかったことがたくさん学べた。日本よりも進んでいる産後ケアを直接自分の目で見て、調理院や助産院、病院で色々な話を聞くことが出来てとてもいい経験が出来たと思う。1年生のうちに、このような貴重な経験が出来て本当に良かった。また、産後ケアだけでなく、韓国の歴史や文化も学べたので貴重な経験になった。5日間の滞在だったが、毎日充実した日々を送ることが出来た。この研修に参加して本当に良かった。経験したこと、学んだことを忘れずにこれからも座学や実習の中でたくさんのことを身につけていきたいと思う。

韓国産後ケア研修

看護学部看護学科

1年

女優の小雪さんが二児を出産後、わざわざ韓国まで行き、産後のケアを行っていた。韓国での産後ケアについて、私が興味を持ち始めたのは、小雪さんのドキュメンタリー番組を観てからだ。

まず、産後調理院(サヌチョリウォン)とは、出産を終えた母親の体の回復をサポートする民間施設である。体を早く回復させるため、室内は暖かくしてあり、24時間体制で赤ちゃんのお世話をしてくれ、ヨガや、エステが出来るところも多くある。この程度の知識で、韓国の産後ケア研修が始まった。

はじめに訪問した産後調理院は、日本円では20万円前後で利用できるという、とても経済的にも良い施設だった。まず、驚いたのがダブルベッドであって、旦那さんと一緒に泊まれる、という点だった。やはり、産後のケアといっても一人では孤独で不安ではないのかな、と疑問だったので、母親は安心して体調管理できるのだろうと感じた。利用者は、1ヶ月に約25人、2週間の利用であった。全身マッサージは3回行い、産後は2回行う。契約をしてあれば、産前のヨガも行う予定であるらしい。今までの外国人利用者はカナダ、オーストラリアなどがいるが、日本の利用者はまだいない。日本で課題になっている母乳に関しては、韓国でも同様に課題になっており、調理院では母乳ケアをおこなっている。その結果ほとんどが母乳で赤ちゃんを育てられている。

この調理院では、週に2回小児科医の先生が来て新生児の健診を行っている。調理院では治療は出来ないため、異常が発見されたときは大きい病院に搬送する。調理院と病院とのつながりも、しっかりと整っている。

次に訪問した調理院では、一軒目と同様なサービスが整っていたが、特に、よもぎ蒸しという韓国特有の健康法も取り入れられていた。食事にも気を遣い、薄味のものが多かったり、韓国伝統の産後のわかめスープも多い。また、この調理院でも希望があれば旦那さんと一緒に泊まれるようになっており、ヨガやマッサージも取り入れられていた。

韓国の助産院では、日本との差を多く見つけた。韓国では、助産院に滞在する期間は出産後だいたい3~4日である。出来れば5~6日滞在して、母親が赤ちゃんを抱いて階段を降りられるのが良いそうだ。助産院を出てからは、産後調理院へ入る人もいる。お産は、旦那さん立ち合い可能である。希望があれば、第一子など、お兄ちゃん、お姉ちゃんとなる子も立ち合いが可能だが、中には母親が辛そうなところを見られない子供も多いという。

助産院で出産がおわり、入院している母親の旦那さんに話を伺うことが出来た。病院ではなく、助産院で出産しようと選んだ理由を尋ねると、母子の自然な関係を築けて、母親がストレスをなく出産出

来るから、と答えてくれた。不安はもちろんあったが、助産院の先生達にいろいろ話を聞いて、何か問題が起きて、大きい病院との連携がしっかりしていて、不安は軽減したそうだ。だいたい、病院ではなく助産院を選ぶのは母親である。

最後に訪問した聖愛病院は、1968年に小児科として始まり、45年間で123000人もの子供が生まれた伝統のある病院だった。そこでは、産婦人科の病棟を主に見学した。毎年1000人弱の子供が生まれているそうだ。男女の比率は、男51,8女48,2である。帝王切開は、45,4%を占めていたが、それは他の病院では治療できない危険な患者が多いからであった。90%以上が無痛分娩であり、家族の分娩室には子供も入ることが出来、産婦の母親も入ることが可能であった。病室は21床で、入院日数が2日間と短いため産後のケアはあまり行っていない。そのため、産後は調理院へ80%~90%の人が行く。母親は看護師の多い産後調理院を選んでいるという。助産師教育を行っている病院であり、病室は、韓国では珍しい母子を同室にしている。

韓国でたくさんのお話を聞いて、日本にも調理院が必要だと改めて感じた。なぜ、日本には産後調理院が広まっていないのかと考えた。坂梨教授が日本では産後ケアの意識が低い、産後調理院での費用が高いため経済的な理由から、産後調理院を作っても患者さんが来ないと聞き、もっと産後ケアについての意識を高める必要があると思った。韓国の産後ケアに関してのいいところを日本にも取り入れたら、少子化対策として繋がると考える。

特に、調理院という施設は、1番大切な身

体のケアを重視しているのもっと日本にも普及され、利用しやすくなれば、母親も安心して子供を産めるようになるのではないかと感じた。

この韓国での産後ケア研修で、日本と韓国との差など、たくさん学ぶことが出来た。そして、韓国も日本と同じように母乳育児や少子化が問題であると知り、他国の医療のいいところを取り入れれば、もっともっと良い医療になっていくのだろうと感じ、国際交流の大切さを改めて知ることのできる、とてもいい機会だった。

韓国研修レポート

看護学部看護学科

1年

今回の韓国での研修では初めて知ることも多く、私にとって驚きと感動の連続であった。また、韓国の歴史についても沢山学べた。

まず、ベベリタ産後調理院には夫婦で使える部屋が15個あり値段は250万ウォンほど。泊まる期間は病院などを退院して2週間。スタッフは18人程度で、そのうち1人が助産師、5人が看護師、その他は補助の人だそう。1か月に患者さんは25人ぐらいが利用する。韓国の方だけでなく、最近は、カナダ、オーストラリアといった外国の方も利用するようになってきている。この調理院にはまだ日本人は来ていないそうだが、韓国の産後調理院を訪れる日本人は増えてきている。女優の小雪さんが利用したことでも有名になったのだと思う。また、母乳クリニックセンターも兼用しているので母乳ケアも充実していた。母乳ケアを目的として入ってくる人も多い。

私は今までそんなに母乳ケアが大切だと知らなかった。だから、母乳ケアのメリットを簡単にだが調べてみた。その結果、母乳が栄養面において完璧であること、母乳から与えられる免疫機能が大変重要であること、母乳が産後の母体回復に密接に関わっていること、母乳をよく飲む赤ちゃんは、離乳食への移行が楽であること、授乳するお母さんの心臓の鼓動が伝わり、感情が豊かに育まれることなどそのほかにもたくさんのメリットが

あるとわかった。

次に、ハンアルム産後調理院を訪れた。そこは、とても高級そうで設備が素晴らしかった。食堂やサウナまで備え付けられていた。お母さんが安心して、ストレスなく生活できる環境だと感じた。

二つの産後調理院を訪れ、一番大切だと言っていたのが病院とのつながりだと言っていた。産後調理院は一般の人でも設立でき、経営することでたくさん問題があるのも事実だ。例えば、医療機関ではないため突然、褥婦や新生児に何か起こっても直ちに診療ができないこと。また、病院や診療所との連携システムの構築が義務化されていないことだ。その他にも、宿泊業と分類されているため施設運営やサービスの質を担保する法律はなく新生児の感染症対策への遅れから感染が拡大したことや褥婦の急な出血や発熱への対応が遅れるなども問題となっている。

助産院にも訪れた。オープンファミリー助産院はとてもアットホームな印象である。田舎のおうちのようでゆったりとした気持ちになった。

そこでは、3人の院長が一緒に運営していました。利用者は月に20~30人くらいで、宿泊期間は3、4日のようだ。韓国では、助産院の数は増えているのだが助産院を利用する人は減る傾向にある。

助産師が行う役割として大切なのは産前の母体のケア、分娩、産後の母子のケ

ア、おっぱいの管理など母乳ケアがある。助産師には産後ケアの役割も含まれているところが一般の病院との異なるところである。

そこで、その時助産院を利用していた家族に、助産院を選んだ理由を聞いてみたところ、いろいろ調べた結果、赤ちゃんとお母さんの自然な分娩ができる点や、ストレスなく生活できる点に魅力をもったそうだ。分娩したばかりの家族の意見が聞けたので本当にいい機会となった。

聖愛病院という大きな病院にも訪れた。そこでは、私たちが盛大に歓迎してくれ驚いた。聖愛病院は1968年に開業し45年間の間に約13万人の赤ちゃんが生まれているそうだ。常に、お客さんの満足と、看護職の管理の質を考えながら動いているということで、スタッフ一人ひとりがてきばきと動いているように見えた。

先生の話聞いて驚いたのは、韓国では無痛分娩が90%だということだ。日本では、それほど多くないが、世界を見ると無痛分娩が多くなってきているようだ。分娩の仕方も日本同様たくさんあった。アロマやボールがあるなど私が聞いたことないものもあったので勉強になった。

この韓国研修で病院、産後調理院のことでは初めて知ることも多く、沢山のお話を聞いて良い経験となった。その他にも、韓国の歴史についても学べた。今まで、テレビドラマで見るとはあったが実際に見て、話を聞きもっと興味をもつことができた。

他文化に触れることは、これからいろいろなことを学んでいく中でとても役に立ち、財産になると思う。今回は、日本と韓国の出産方法の違い、出産直後の母

子を手厚くケアすること、母親が育児支援を受けられるシステムがしっかりしているなどの違いを理解した。専門の人がいることによってよりよいケア、育児教育が受けられるのだと感じた。これを機に今後の日本の産後施設、産後ケアについても考えていきたい。

韓国産後ケア学習プログラムを終えて

看護学部看護学科

1年

私は8月26日～8月30日まで韓国産後ケアプログラムに参加した。1日目には国立民族博物館と青瓦台に行った。国立民族博物館では過去から現在までの韓国の生活文化を展示しており、伝統衣装などを見ることができる。青瓦台は大統領が暮らしている場所で、敷地が広く警備員の人数が多く驚いた。

2日目は2つの産後調理院と助産院に行った。1つ目はベベリータ産後ケアセンターである。ここはベッド15床、スタッフ18人(看護助手9人、助産師1人、看護師5人、お手伝い3人)で産科医が週に2回診察に来る。ベベリータ産後ケアセンターでは母乳で赤ちゃんを育てることに力を入れている。韓国では出産して3日後に退院するため母親の母乳指導ができず母乳が出ない母親が多い。そのためこの産後ケアセンターでは母乳センターと一緒にあり、母親に母乳指導を行っている。

2つ目はハンアルム産後養成院である。ここの養成院では出産で消耗した体力を早く回復するようにケアすることを基本としており、様々なプログラムの中でも産前教育や父親が参加できるプログラムが人気である。その他にも産後ヨガやエステなどがある。産婦の体力が早く回復するようにわかめスープなどの栄養豊富なメニューで構成されており食事は1日4回、間食2回、韓薬2回が支給される。3つ目はオープンファミリー助産院であ

る。ここでは月に20人が分娩しており3～4日で助産院を退院し、ほとんどの人が産後ケアセンターに行き母乳の指導やヨガなどのレッスンを受ける。

3日目は聖愛病院を見学した。ここは45年間で12,300人が生まれ、424病床、22科のとても大きな病院である。聖愛病院は帝王切開率が45.4%で比較的に高いがその理由は、危険な赤ちゃんが他の病院から運ばれてくるため帝王切開率が高くなってしまおうということである。週に1回産婦のための教室も開かれている。この病院を退院した80～90%の人が、産後ケアセンターに行く。聖愛病院で働いている方たちは私たちを温かく迎えくれ、病院内の見学で分娩台やICUなどを案内してもらい勉強になった。

4日目は韓国民族村とKBS、水原華城に行った。韓国民俗村では韓国の年間行事と生活様式について展示されており、絹糸巻き体験や乗馬体験、俵づくり体験などが体験できる。さらに時代劇や映画のロケ地にもなっており、韓流文化観光地としても注目を集めている。次にKBS(韓国放送公社)ではドラマが放送されるまでの過程を教えてもらい、さらに実際にカメラの前に立ち自分がテレビではどう映るか体験させてもらった。実際にドラマの撮影をしているスタジオにも入らせてもらい、大道具や小道具のクオリ

ティの高さに驚いた。水原華城は1997年に世界遺産に指定され観光客にとっても人気のある場所である。私たちが行った時は雨が降っていてあまり長くは見学できなかったがとてもきれいな場所だった。

他にも舞台の「JUMP」を観たりした。JUMPは韓国の伝統武術であるテコンドーとテッキョンを中心とした武術と高難度のアクロバットなどの演技を組み合わせた演出で息をつく暇もないほどのスリルと興奮、コメディータッチのストーリーになっている。韓国の言葉が分からなくてもだれでも笑える舞台になっていた。自由時間には地下鉄に乗って出かけた。日本の電車と少し違い最初は戸惑ったが、現地の人に教えてもらいながら目的地まで辿りつくことができた。

今回の韓国産後ケアプログラムのお話を聞いたときに、産後院についてテレビで見たことはあったがどのようなことが行われているのか知らなかった。韓国の産後院はとてもきれいにされていて、床はオンドル(韓国式床暖房)になっていて温かく落ちつける空間になっている。家族も一緒に宿泊することができる助産院もあり、家族の時間も大切にしている。母親の骨盤を元に戻すためのいすが各部屋に備え付けられていたり、アロマを焚いているところもあった。一方日本では出産して5日～6日で退院し、そのあとは実家にいることが多く、産後ケアセンターを利用する人はとても少ない。その理由として、日本にはまだ産後ケアセンターが少なく認知度が低い。さらに、出産費用が高いため産後院に行く余裕がないなどが考えられる。しかし、産後調理院

を見学し、産後ケアを行うことは母親にも子供にも良いと感じた。そのため、今後日本にも産後院は必要であると、今回の韓国産後ケア学習プログラムで学んだ。私は、韓国の人には日本人に対して冷たいというイメージがあったけれど、今回韓国に行って現地の人と関わってみてとても温かい人たちだと感じた。お店では日本語を話せる人が多く、私たちの話を一生懸命聞いてくれて嬉しかった。将来看護師になった時には患者さんの話を親身に聞けるよう、これから努力していきたいと感じた。

韓国母性看護学視察研修

看護学部看護学科

1年

私は今回、4泊5日の韓国母性看護学視察研修に参加した。この5日間の中で産後調理院を2件、助産院を1件、病院を1件、訪問することができた。

2日目にまず行ったのは、ベベリタ産後調理院である。ここの調理院には、全部で18人のスタッフがいる。助産師が1人、看護師が5人、補助看護師が9人、その他厨房や雑用などで2人、働いている。医師は、常駐はしていないが週に2回小児科医が検診に来る。ベッドは全部で15床あり、すべて夫婦で使えるようダブルベッドになっている。夫の宿泊は可能だが、上の子どもたちの宿泊は今年の10月からはできないことにしたそう。平均の入院人数は1ヵ月に25人ほどで、1人あたりの利用日数はだいたい2週間程度である。また、部屋は、基本的には赤ちゃんは新生児室に入れられるが、お母さんの希望があれば母子同室にすることも可能である。ここに来るお母さんのほとんどが母乳育児を希望しており、母乳育児に対する意識は高く、母乳ケアを目的にくる人も多い。他にも、マタニティークラスやマタニティーヨガ、2回の全身マッサージなども受けることができる。また、出産の前から予約をしておけば産前にも3回の全身マッサージを受けることができる。産後に出される食事にもこだわっている。特に力を入れているのはわかめスープであり、産後のお母さんにはとても良いらしい。入院費用は2,500,000ウォンくらい、日本円にして約20万円程度で

ある。日本では出産は保険がきかないが、韓国では保険がきくためどの病院でもだいたい2,000,000ウォン～3,000,000ウォンくらいで産むことができる。また、ほとんどの分娩施設は大抵2泊3日ほどなので、その後すぐに産後院等に入る。ベベリタ産後調理院には、中国やカナダ、オーストラリアなど、海外からも利用しに来る人がいるという。

次に訪れたのはハンアルム産後調理院である。ベッドの数はダブルベッドが全部で18床あり、新生児室はあるが赤ちゃんとお母さんは同室である。夫の宿泊も可能であるが、その他の家族は入室が制限される。入院中のケアプログラムは、とても豊富である。ラマーズ分娩法や母乳授乳法を父親と共に学ぶ出産準備教室や、産前・産後教室、育児講義、産後ヨガなど、あらゆるプログラムを受けることができる。また、酸素発生器やヨモギ蒸し椅子、赤外線スタンドなどの器具も充実している。食事は一日に4回あり、間食も2回支給される。利用期間は約2週間で、費用は部屋によって異なるがだいたい4,300,000ウォン～5,800,000ウォンである。

この日の最後に訪れたのは、オープンファミリー助産院である。ベッドの数は全部で7床あり、水中分娩室もある。家族は出産に立ち会うことができ、わざわざ上の子どもたちを呼んで一緒に見守らせることもあるという。入院期間は、本人

の希望によって異なるがだいたい平均して3日~4日である。理想は5泊6日だそう。出産後2~3日でここを出てしまうと、母乳育児成功率はほんの30パーセントほどになってしまうという。ちなみに、ここで5泊6日みっちり指導を受ければ成功率は90パーセントほどにもなるそう。分娩件数は、月におよそ20人~30人程度である。ここオープンファミリー助産院を訪れた際、わたしたちは実際にここを利用した産婦さんの旦那さんに話を聞くことができた。その旦那さんに、なぜ病院ではなく助産院を選んだのかと質問すると、最初は助産院など全然知らなかったがいろいろ調べてみた結果、母親と赤ちゃんの自然的な関係を築くことができそうだった、自然分娩によって変なストレスもなくあくまで自然に産めるだろうと思った、と話してくれた。心配はなかったのかと尋ねると、病院との連携がしっかりしていると聞いたから安心した、と言っていた。

そして3日目には、聖愛病院を訪れた。ここはとても大きな病院であり、院長や理事長、産科長など様々な方々が集まってわたしたちを歓迎してくれた。この病院の産科にはベッドは21床あるという。この48年間の歴史の中で123,000人もの赤ちゃんがこの病院で産まれた。そのうちの45.4パーセントが帝王切開による分娩であり、割合としてはとても高い。その理由は、ここが大病院であるため提携している助産院や他の医院から、異常事態の母体がたくさん運びこまれてくるからである。聖愛病院には新生児重患者室

というところがあり、集中治療室15病床と隔離室で、高危険新生児治療と看護を行っている。最新人工呼吸器およびインキュベーター、モニター、多様な光線治療器、移動型レントゲン機、移動型各種超音波器機なども取りそろえられている。また、韓国では90パーセントが麻酔を使っただけの無痛分娩であるという。家族の出産立ち会いは、希望があれば一緒に立ち会うこともできる。部屋は24時間母子同室である。産後のケアはここではほとんど行っていないため、80~90パーセントの人が産後調理院等の施設に入るという。

今回のこの視察研修旅行を通して、私はたくさんのお話を学ぶことができた。韓国では麻酔を使った無痛分娩が当たり前だということにはとても驚いたし、助産院や産後調理院は基本母子別室だということにも驚いた。しかし、韓国は産後ケア施設がとても発達していて今大変注目されていると聞いて行ったが、私としてはそこまででもないように感じた。向こうの産後ケア施設はほとんど素人の方がやっていることが多く、そのことを助産院の助産師も病院の産科医もあまりよくは思っていないようだった。むしろ日本のケア、制度の方が素晴らしいと言っている方もいた。確かに日本には産後ケア施設というのはまだ本当に少ないが、それは今現在ある助産院のあらゆるケアで十分ではないかと私は思った。日本の助産院では、産後も母親教室や赤ちゃん教室など、助産師とお母さんたちが集まって悩みを共有し合ったり相談して解決したりする機会を設けてくれるし、

母乳マッサージや新生児の定期検診なども行ってくれる。また、産後だけでなく、産前からマタニティークラスという教室があったり、妊婦のためのヨガ教室や定期健診も行ってくれたりする。それらのことを考えると、日本に産後ケア施設を新しく作ろうとしなくても助産院がその役割をまかなうことができてるのではないだろうか。しかし、これはあくまであまり詳しい知識もない私の個人的な意見である。そこで、これから病院、助産院について学んだり、実習で実際に訪れたりした際には、今回の経験を思い出して比較し、役立てていこうと思った。

韓国研修レポート

看護学部看護学科

1年

私は、産後ケア施設の見学をするために韓国へ行った。韓国は日本よりも産後ケアに関する施設がたくさんあり、進んでいる。それがどのような所なのか学ぶために行った。4つの施設へ行き、2つは産後調理院、助産院、病院の産婦人科とすべて違う魅力がありとても勉強になった。

*ハンアルム産後調理院・ベベリタ産後調理院

調理院は、助産院や病院と違い一般の人でも開業することが出来る。そして、母親が運動できる部屋もあり、そこにはヨガマットや大画面のスクリーンなどがあった。そして、サウナの設備まであった。その日の日程などが書いてある黒板があり、運動・食事などしっかりと予定が立てられていた。新生児は病院のようなガラス張りになっている部屋のベッドに寝ていた。そして、母乳に関するケアや教育もしっかりとしてくれて、それ専属の人がいた。産後の肥立ちや母乳教授の為に、食事にも気を使っていた。韓国の伝統料理ワカメスープなどがあった。

*オープンファミリー助産院

この施設は、照明が明るくなくオレンジっぽい照明で、ベッドではなく布団の

部屋があり、昔風な感じのとてもいい雰囲気助産院だった。助産師もいるので安心感もあった。ここは、浴槽の中で出産する設備があった。浴槽の中で、父親が母親を後ろから抱いて産むという方法だった。今まで聞いたことがなかったので少し驚きましたが、支えられているという安心感がありそうでいいなと思った。そして病院とは違い、出産を終えてからの入院期間も長いので産後ケアもしっかりとしてくれる、生まれてからすぐ新生児室に連れて行かれないで、お母さんと一緒にいられるというのもあり、母乳率が病院より良いそうだった。

*聖愛病院の産婦人科

保育器や新生児重患者室などあった。この病院はハイリスクの新生児治療と看護を担当していて集中治療室15病床と隔離室があった。なので、低体重児や光線療法をしている新生児もいた。毎年約400名の高危険群の新生児を集中治療することで、韓国のソウルの代表的な病院となっているところだった。病院は新生児や母胎に何かあった時に、すぐ医療的処置を行えるので安心して産めると思った。

病院と産後ケアセンター、助産院の違

いについて調べてみた。病院は総合病院等で出産すると、緊急帝王切開になったり、生まれてすぐ保育器に入れられたり、新生児室に連れて行かれるなど、母子共にという考えが助産院などよりないと思った。

助産院は、何か緊急事態が起きた時にその場で適切な医療行為がすぐに行えないというのがある。でも助産院を開業するには、産婦人科医院との提携が必要なので安心かなと思った。それぞれメリット、デメリットがありお産というのはリスクがあり、とても大変なことなのだと改めて思った。

今回、韓国へ行き産後ケアについて学んで日本にも必要ではないかと思った。日本に韓国の産後調理院に似たような施設、武蔵野大学附属産後ケアセンターというのがあるが、費用も高く利用者は少ないとのこと。その点韓国は、費用もそれ程高くなく、利用者もたくさんいる。産後、実家に帰りいろいろ手伝ってもらえるならいいが、そういうことが難しい家庭もたくさんあると思う。そのためにも、こういう施設か身近にあれば、母親も嬉しいと思うし、子育てについての悩みなども、同じ仲間と共有しあうことができれば少しは気持ちが楽になったりするのかなとも思った。

韓国では一般人が開業することができる。でも正直私は、一般人に自分の子供を預けるのは怖いなと思った。保育園とか少し子供が大きくなっているので良いと思うが、新生児で預けるといのは少し不安な部分もあると思った。これについて、今回案内してくださった方と施設の院長さんが話し合っていました。韓国の中でも難しい問題なのだなと思った。

私も将来、助産師になろうと考えている。国によつての考え方などを、今学ぶことが出来とても良い経験になったと思う。これからも将来の勉強をしていくにあたって、自分の国だけでなく他国の考え方などもっとたくさん学び、日本にとりいれていければいいと思った。

韓国母性看護学視察研修

看護学部看護学科

1年

| 施設 | ベベリタ 産後調理院 | ハンアルム 産後調理院 | オープンファミリ ー助産院 | 聖愛病院 産婦人科 |
|-------------------------|--|--|---|--|
| 設立 | 7か月 | 14年 | 1年 | 45年 |
| 施設長 | 一般女性 | 看護師 | 助産師(3人) | |
| 床数 | 15床 | 18床 | 7床 | 21床 |
| 従業員 (看護師：助産 師：補助) | 18名 (5：1：12) | | | |
| 利用者数 (約一ヶ月で) | 25名/月 | 30～40名/月 | 20～30名/月 | 853件/年 (年々減少) |
| 料金 | 250W (約25万円) | 400～500万W (約40～50万円) | | |
| 特徴 | <ul style="list-style-type: none"> ・上の子は入室不可。 ・新生児室があり母親の希望で母子同室可 ・小児科の診察(週2回)、治療は出来ない。 | <ul style="list-style-type: none"> ・部屋の間にエレベーターあり ・新生児は同室で部屋からの眺めがよい。 ・父親のための教室がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・分娩の際、父親がへその緒を切る ・上の子もお産に立ち会う。 ・母乳育児に力を入れている。 | <ul style="list-style-type: none"> ・90%以上が無痛分娩 ・搬送ケースが多いため帝王切開の割合が多い ・入院期間は約2日間 |

5日間、日本を離れて韓国で韓国の文化や産後ケアについて学んできた。実際に施設の中に入り、見て聞くことで産後ケアセンターや病院の雰囲気や直に触れることができた。そこで、産後ケアセンター2つ、助産院1つ、病院1つそれぞれの施設の特徴についてまとめ、韓国の産後ケアについて感じたことを述べる。

韓国では、産後ケア+母乳を重要視している。そのため、産後ケ

アセンターが多く設立されてきていて、利用する人も多い。産後ケアセンターでは、母体のマッサージで母乳を出しやすくしたり、リラックスできるような設備が整っている。また、父親の指導教室があったりする。

韓国も日本と同様に出生率が低いので、子供を産みやすい環境づくりや産んだ後のケアを良くしようと努力しているが、まだまだ制度が整っていないと感じた。韓国

の産後ケアセンターは一般の人でも開業できるので、新生児の取り扱いなども一般の人が行ったりする。病院内に設置されていれば安心だが、利益目的で診療所つきのケアセンターとして運営しているところが増加している。聖愛病院で質問したところ、産後ケアを一般の人が行うべきではないと考えていて、産婦さんたちは医師のいる施設を選び始めているようだ。（病院を退院して産後ケアセンターに行く割合は80～90%）

日本も低出生率を改善する努力がもっと必要である。韓国のように産後ケアを重点に置いて、子供の産みやすい環境作りや、その後のケアの充実などを図るべきと考える。日本にも産後ケアセンターがあるが、決して安いものではなく韓国のように需要があるわけではない。よって、ただ韓国の模倣をして施設を増やすだけでは有効とは言えない。いかに産後ケアが母体にとって大事なのか、新生児にどれだけいい効果があるのかを知ってもらう必要があるのではないだろうか。

また、韓国のように一般の人が開業するのはよくないと考える。より安全で安心して産後ケアセンターを利用してもらうには、新生児を取り扱っても大丈夫と言えるような資格を持っていないと開業できないなど、制度を作るべきである。

オープンファミリー助産院では

自然分娩について話し合いが出たが、すごく魅力的だと思った。水中で赤ちゃんを出産するなど、病院の機械に囲まれた固い雰囲気とは違った感覚で出産することができる。また、上の子を出産のときに立ち合わせることで、怖いことではあるが焼きもちを焼かせない効果があることには驚いた。この施設で出産した方の夫の話を聞くと、妻のストレスができるだけ少ない状態で出産させたいと考えていたらしく、病院でないことは不安であったが自然分娩を選んだようだ。その結果、無事に元気な赤ちゃんを産むことができ母親のストレスも少なく、病院のような圧迫感を感じないで産むことができたようだ。

韓国と日本の文化の違いで実感したものは路上販売が多いことである。韓国では屋台がたくさん出され、伝統的なトッポギやキンパがいたるところで売られていた。駅の中でも物が積み上げられ、安く販売を行っていたのである。日本ではあまり見られない光景で、気さくな店員さんたちが多く、観光客は買わずにはいられないような雰囲気であった。

5日間という短い期間でしたが、金銭面含めて充実した研修になった。韓国語をいくつか実践することができ、ハングルを読みながら地図を見たりして語学の勉強にもなった。

産後ケア研修プログラム

看護学部看護学科

1年

4泊5日の韓国産後ケア研修で調理院、病院を含め4か所見学をした。調理院とは、産後の心身の回復サポートをはじめ、24時間体制で赤ちゃんのお世話、母親のマッサージやヨガ、母乳育児教室など行う民間の専門施設のことだ。この施設では常に床が温かく、妊婦さんや産婦さんの体を冷やさないようにと気を配っている。その他に、ヨガルームや各個人の部屋、マッサージ室などある。また食事も栄養バランスのとれたもので、スタミナをつけるために徹底している。

ベベリタ産後調理院は助産師などスタッフを含め18人ほど駐在しており、小児科医が週2回で来るなど、赤ちゃんと母親、その家族が安心して産後ケアを受けられる。また、病院との連携もとることができており、母親の体調が急変するなど万が一のことがあってもすぐに婦人科に駆けつけることができる。さらにここは、母乳センターも設立しており、母乳で育てることを重要だと考え、力を入れている。しかし母親が疲れているのであれば、新生児室に預けることが可能だ。費用は施設によって異なるが、ハンアルム産後調理院は、432万ウォン（約43万円）、ベベリタ産後調理院では250万ウォン（約25万円）となる。

次に見学した助産院は、日本と同様に出産は兄弟や夫も出産に立ち会うことができる。

助産院とは、妊婦の希望に合わせた様々な方法で、助産師が正常分娩を取り扱う

施設だ。自然分娩と産後ケアに特化しており、母親と新生児のためならと、利用する人も少なくはない。オープンファミリー助産院では、2年のデータから、出産してから調理院に行くと母乳育児成功率は90%に上る。韓国で助産院が注目されているかということ、韓国では家で出産することが多かったが、保健制度の見直しやTV番組の報道により利用者が増えている。韓国でも核家族化や少子化が問題となっており、こうした産後ケアに力を入れることで、母親が出産しやすい環境になっていき出生率も上がっていくのではないかと考えた。

次に、聖愛病院を見学した。この病院は、開業初期には産婦人科・小児科を中心としていた病院であったが、現在では総合病院となっている。1968年に開業し、時代の要求に応じて最先端の技術を導入している。また、入院患者や外来患者のベッド数422床、医師57名、看護師300人とかなり大きな総合病院であった。病院内はバリアフリーが施されており、階段ではなくスロープになっていた。この病院の産婦人科病棟は21床あり、24時間母子同室が可能だ。ここでも、病院食にこだわっており産婦さんにスタミナをつけるために毎日、コイのエキスや鶏のバーベキューなど配られる。出産を助産院ではなくこうした病院を利用する理由の1つとして、病院ならではの充実した設備があり妊婦さんも安心してことから病院を利用する家族もいるということだ

った。

日本では産後ケアセンターというものはほとんどなく、出産をし退院したらそのまま普段の生活に復帰する人や、出産自体が里帰り出産であり体力が回復するまで実家で安静にする人と様々だ。現代社会は育児休暇や出産育児一時金制度など、大分育児出産しやすい環境になったが、まだすべてが整っているということではない。また、日本は深刻な出生率低下に陥っている。未来を担う子供が少ないと日本の将来の雲行きは危うくなっていく。財政面からの支援、医療・保健制度、育児環境など重要だが、子供をどのように育てていくのか母親が学んでいくことも、子育てに欠かせないことと思っている。これをサポートしてくれる産後ケアシステムを日本でも進んで導入していけば、新生児や母親は負担を軽減させて育児に専念できると思った。

4泊5日の韓国研修で見学した場所は、調理院、助産院や病院だけでなく、国立民族博物館や水源華城、韓国民俗村、KBSドラマセンターなど韓国文化についても学んできた。国立民族博物館はガイドさんから説明を受け、当時朝鮮半島で考えられていた人の一生についてや、出産や歳の節目、結婚式、お葬式に行う行事について学んだ。同じアジア圏だが、海を渡ればその国の独特な文化が広がっていた。世界遺産である水原華城は広大な敷地面積で、いかに敵陣から守るかという仕組みが施されていた。なかでも印象に残っている話は、敵の侵入を防ぐために、堀にあけた穴から油や熱湯を流していたという話だった。日本の城も敵の攻撃を

防ぐために堀りを作っていたように、様々な工夫されていた。また、世界遺産ということもあって整備されており眺めはとても綺麗だった。しかし、水源華城は朝鮮戦争で大きく破損してしまったと聞いたとき、時代が進んでいくにつれて戦闘方法や武器が進化していったことを間近で感じ取ることができた。

国立民族博物館は、昔の朝鮮民族の生活について学ぶことができた。農民と貴族の生活にはやはり格差があり、農民は貧しい暮らしをしていた。農民の生活を支える道具であったり、知恵であったり、当時の生活をいかに便利に過ごすための工夫は時代を超えても変わらないものだと実感できた。韓国の歴史や文化に触れることで新しいものを学ぶことができ、自分の感性が磨かれたのではないかと思っている。異文化に触れるということは自分の考え方を変えたり、知識を増やすことができたりと経験知を増やしてくれる。今回産後ケアプログラムとして韓国へ研修に行ったが、文化・歴史もたくさん学び、充実した4泊5日となった。

研修で得られたこと

看護学部看護学科

1年

2つの産後調理院と、助産院、病院を見学した、韓国母性看護学視察研修を通じて学べたことは大きく分けて2つある。それは主に韓国の産後ケアはどのようにしているのかと、なぜ韓国は産後ケアが発達しているのかということだ。

まず韓国の産後ケアはどのようなことをしているのかというと、産後の回復をサポートするとともに、子供のお世話の仕方を学んだりするところで、主に母親をマッサージして産後のむくみをとったり、ヨガをしたりといったリラクゼーションや、母乳や沐浴を教育したり、父親も共に参加できるプログラムがあったりもする。また、基本は母子同室だが、母親がしっかり休養を取れるように新生児室があり、子どもを預けられるようになっている。また産後の回復がメインなので、食事は栄養バランスのとれたものである。実際にハナルム産後調理院で運よく昼食のメニューを見ることができた。栄養バランスがとれ、消化に負担にならない量の食事が配膳されていた。見学に行ったとき、事前にインターネットなどで調べたことと照らし合わせながら産後調理院の院長さんや助産師の会長のリ・インジャさんのお話を伺ったが、両方の産後調理院とも期間は2週間であった。またベベリタ産後調理院では産後のケアだけではなく産前に契約していると、産前にマッサージなどのケアも受けられるようだ。そして、そのような産後調理院

を利用する人は韓国にとっても多く、3日目に見学にいった聖愛病院の方のお話によると、韓国では退院していくお母さんの8～9割退院後産後調理院に、2週間入ると伺った。

そこでなぜこのように多くの人を利用するのか考えてみた。その結果、2つの理由が考えられた。第一の理由は、施設数が多いこと。韓国の産後調理院は、一般人が開業していることが多く、医療機関との連携がとれていなかったり、新生児の事故が多いことが問題となっているようだ。産後調理院のように産後ケアの専門の施設は、韓国内に約860箇所あるのに対し、日本にも似ている施設はあるが、とても少なく、ある施設では、日本での利用者は2年間でたったの5人との報告もある。日本の場合は、助産院と併設されている場合がほとんどで、助産師が常について、医療機関とも連携がとれるので安心な分、ベッドの数が限られているので、その分利用者も少ない。施設数が少ない分、知名度も低い。その知名度の低さも、利用者が少ない原因ではないのか。第2の理由は、出産してから退院までの期間の違いではないかと推測する。日本では産科を、大体5泊6日で退院するのが一般的で、入院中に母乳教育なども行うが、韓国場合は2泊3日でそのような教育をする時間がないのが産後調理院を利用する理由の1つではないかと考える。なぜこんな短期間で退院させられるのか。韓国の医療負担が高いからなの

かそれとも、そうではないのか気になったので韓国の保険制度を調べてみた。韓国にも日本と同様、素晴らしい保険制度があり、国民は2割負担で医療を受けられる。そのほかに、日本と韓国で似ていることといえば、合計特殊出生率が低いということや、核家族化が進んでいて、祖母が産後まもない母親のお手伝いをできないという状況にあることが似ていた。

今回の研修旅行では産後ケアのことだけでなく、実際に韓国へ行ったからこそ実感したことがいくつかあった。韓国では今もなお、儒教による孔子の教えが受け継がれているということだ。韓国の学歴社会は有名だがそれは、儒教の教えで「武」より「文」を大切にする教えがありそれが名残として今にも残っていると伺った。現地の人と会話してみて感じたことは、都会だったからという理由や学生街によく行ったからかもしれないが、語学力が高くとてもきれいな英語を話していて、とても熱心に勉強しているのだろうと感じた。勉強のことだけでなく、儒教は男性優位の社会で、長男をととても大切にする習慣も残っているようだ。自由行動のときに現地に知り合いのいる友人とサムギョプサルを食べに行ったとき、そこのお店の女将さんから話を聞いた。

「産後の母親を、昔は実家で面倒見ていたけど、最近は産後調理院ができたから、みんなお祝いだけあげで産後調理院に入れちゃう。長男が生まれたら、ちょっと高級な産後調理院に入れたりする。」と話してくれた。それを聞いたとき、長男だからという言葉がとても印象に残ってい

る。のちに調べてみたら、韓国では長男を大切にする文化が残っているようだ。今回、研修に参加してみて、学べたことや考えさせられたこともたくさんあった。日本の産後ケアセンターと韓国の産後調理院は、ケアに関しては似ているけれど、経営の面では似ていないし、お互い、メリットとデメリットがある。今後、お互いの産後ケアのよいところを取り入れ、双方の産後ケアが発展していけばいいと思う。私たちは本当に良い経験をさせてもらった。隣国なので手軽に行けるが、なかなか産後調理院を見学する機会はないと思う。

今回研修に参加して、もともと興味があった領域だったが、今後の学習が楽しみになった。このような研修を企画してください、ありがとうございました。

編集後記

今回の国際交流事業「韓国の産後支援学習プログラム」は、途中雨に見舞われたものの、順調に経過できました。学生にとっては、大学生活初の海外研修であり、貴重な体験になったことでしょう。

今回のプログラムは1年次生を対象としました。母性看護学の授業は未開講であり、事前学習は学生個人に委ねました。報告書の「目的」でも触れたように、2013年に女優の小雪さんが韓国の産後ケアセンターを利用し、盛んにマスコミが取り上げた結果、学生のほとんどが、その存在を周知していました。学生のレポートによると、実際に産後ケアセンターを見学し、院長の話聞くことにより、社会状況に応じた産後ケアシステムであること、産後の母親たちのニーズに応じた支援の提供が行われていることを理解できたようです。韓国の産後ケアセンターはサービス業に位置付けられており、医療従事者以外でも開設できます。そのため、学生たちは、施設によって新生児感染症等の産後ケアの質に大きな差異があるという課題にも着目できたようです。

また、語学で韓国語を選択している学生の多くが、このプログラムに参加しており、授業で学んだ語学の知識を活用してコミュニケーションをとっていました。国立民族博物館や韓国民族村、水原華城を訪れ、韓国の歴史や風俗に触れることもできました。

帰国後は、本プログラムでの学びに加え、新たな疑問を探究する学生もおり、看護を学ぶことへの良い刺激になったのではないかと思います。この国際交流事業を一つのきっかけとして、参加した学生が海外に目を向けた活動ができることを期待しています。

この度の国際交流事業では、韓国助産師協会ソウル支部長 In-Ja Lee さんには、産後ケアセンターおよび助産所の見学調整と産後ケアの歴史について講師を務めていただきました。ベベリタ産後養院院長 Lee Gyung-yon さん、ハンアルム産後養生院院長 Kim Nox さん、ファミリーバースセンター院長 Lee Mee-Young さんには、施設見学を受け入れていただきました。また、聖愛病院の金潤光理事長、張錫日病院長、趙泰逸産婦人科主席課長をはじめとした多くの主要幹部の方々には、聖愛病院の歴史と産科医療の現状について講演をしていただきました。本当に、ありがとうございました。

最後になりましたが、ご多忙中にもかかわらずこの国際交流事業にご賛同、ご協力いただきました皆様のお力添えがあり、事故もなく研修を終えることができましたことに深く感謝申し上げます。

関東学院大学看護学部看護学科
報告書作成担当 母性看護学
坂梨 薫
水野祥子
勝川由美